文法現象の換喩分析——客観主義的分析を超えて

菅井三実（兵庫教育大学）

1. はじめに

本稿では、換喩が関わる文法現象を３つ取り上げ、従来の客観主義的な分析に比して換喩による分析の優位性を示すとともに、対照的な観点から言語間の異同についても考察を与えたい。

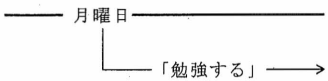
2. 変化動詞の結果的解釈

最初に取り上げるのは、本来瞬時的な変化の局面を過程として表すはずの変化動詞が、継続性のある時間成分と共起する現象であり、具体的には、次の(1)に見られるようなものである。(1a)や(1b)では、動詞のアスペクト的性質と格成分(共起成分)の時間的性質が一致しているが、(1c)では動詞と格成分の間に、見かけ上、矛盾が生じている。

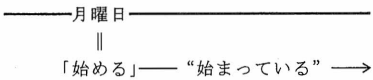
(1) a. 月曜日から勉強する。
　　b. 月曜日に勉強を始める。
　　c. 月曜日から勉強を始める。

ここで問題になるのは、(1c)において、動詞「始める」が本来的には瞬時的な局面を表すものでありながら、「月曜日から」という継続性のある事象を表す時間成分と共起しており、修飾句の時間的な局面の切り取り方と動詞のアスペクトの間に論理的な不整合(ミスマッチ)が認められる点である。と同時に、(1c)は、通常の発話で自然に容認されるという事実も重要である。このことは、(1c)に見られる論理的な不整合(ミスマッチ)が合理的に処理されているということであり、具体的には、動詞「始める」が本来瞬時的な変化の局面を表すものでありながら、ここでは、変化の結果として生じる「始まっている状態」すなわち「勉強している状態」を表しているというものである。(1a)と(1c)の解釈を視覚的に整理すると、次のように図示できる。

(1a')月曜日から勉強する.



(1c')月曜日から勉強を始める.



図(1a')と図(1c')は、それぞれ、(1a)と(1c)の意味的な背景を図式化したものである。(1a')では、「勉強する」という継続性のある事象において、時間成分「月曜日から」が始まりの時点を指定しており、至極ノーマルな描写となっている。これに対し、(1c')の「月曜日から」が表す時間的起点は、動詞「始める」そのものの開始時点ではなく、「始める」ことの結果として成立する「勉強している状態」の開始時点にほかならない。つまり、時間的な継続関係の下で、本来＜変化の局面＞を表すはずの記号が、それに後続する＜結果状態の局面＞を表しているということになり、この点で、時間的な隣接関係に基づく換喩がはたらいているということができる。

こうした現象は英語では、日本語ほど一般的ではない。

(2) a. The Soil Association said planting would start from Friday 15 March at a number of sites.(土壌協会は多くの地域で３月15日から植樹を始めると発表した)

b. The consumer price index is going to be released from Monday onwards for the various states. (消費者物価指数は月曜から各州で発表される)

(2a)は２通りに曖昧(ambiguous)で、１つは「植樹(planting)」が「３月15日」から一斉に始まるという解釈であり、もう１つは「３月15日」以降、順次、始まっていくという解釈である。前者の場合、日本語と同じように換喩が作用するが、後者の場合に換喩は作用しない。(2b)は、「月曜日」以降、順次、発表されるという解釈しかなく、(2a)と(2b)の分布から、英語では日本語よりも換喩解釈がかかりにくいことが分かるだろう。

３.着点目的語の格標示

２つ目の現象として取り上げるのは、移動動詞を述語とする着点ＮＰの格標示に関するものである。英語では、次の(3a)のように着点ＮＰが場所名詞であろうと、(3b)のように非場所名詞であろうと、前置詞句の構造に差異はない。

(3) a. John went to the park.

b. John went to Mary.

(4) a. 太郎は公園に行った。

b. ?? 太郎は花子に行った。

c. 太郎は花子のところに行った。

日本語では、(4a)のように[着点]が場所としての「公園」であれば「ニ格」で標示されるのが通常であるが、(4b)のように[着点]が非場所名詞になると単純な「ニ格」形で標示することはできず、(4c)のように「のところ」などを付与することによって場所性を形式的に保証しなければならないことが知られている。このとき、逆に、英語で(3b)のような構造が許される理由を考えると、①着点ＮＰのMaryに日本語と異なる解釈が加えられるか、②動詞goや前置詞toの方に日本語と異なる解釈が加えられるかの２つの可能性があるが、結論的には、着点ＮＰのMaryに日本語と異なる解釈が加えられるというのが本稿の分析であり、具体的には、着点ＮＰのMaryが「メアリのいるところ」と換喩的に解釈されるというものである。この分析は、山梨(2001:191-192)でも参照点構造という形で提示されているが、以下では、具体的に論拠を示して検証しておきたい。(3b)においてMaryが the place where Mary staysのように換喩的に解釈されることは一般的であり、例えば、listen to me において目的語のmeがlisten to what I sayのように解釈されたり、read himの him がread his writing(彼の書いたものを読む)のように解釈されるとき、人称代名詞のme や him が換喩的に解釈されている。日本語でも「夏目漱石を読む」や「モーツアルトを聞く」のように、有名な人物であれば人を表す名詞が換喩的に解釈されることはないではないが、英語ほど容易ではない。実際、「花子を読む」や「花子を聞く」という表現は、たとえ「花子」が作家や講師あるいは音楽家などであっても、日本語では容認されにくい。逆に言うと、英語では人称代名詞を含めて、目的語ＮＰに換喩的な解釈が成立しやすいというのが１つ目の論拠である。２つ目の論拠は、着点ＮＰに換喩解釈がかからないとすると、全体の解釈に矛盾が生じることにある。もし、着点ＮＰが日本語と同じ解釈を受けるにもかかわらず(3b)が容認されるということは、動詞 go や前置詞 to の方に、着点目的語を場所化する能力を想定しなければならなくなり、そうすると、逆に、Come to my off

ice / my room のように、着点ＮＰに場所名詞が来たとき解釈が冗長になってしまうというものである。

では、日本語では、本当に場所名詞と非場所名詞が本来的に区分されているのだろうか。実は、上の日本語の例で、(4b)の容認度が落ちることを単に「太郎」という名詞の場所性の問題に帰着させるのは、実は適切でない。(4b)が容認不可能になるのは、「来る」という動詞が表す事象において「花子」と「太郎」の相対的な関係に帰着される。実際、次の例が示すように、着点ＮＰが非場所名詞であっても「ニ格」で標示することができるケースが観察される。

(5) a. 小さな虫がまた顔に来た。
b. 貴方にも手紙が行くはずです。
c. お医者さんに行ったほうがいいですよ。

つまり、移動主体が、(5a)の「小さな虫」や(5b)の「手紙」のように、相対的にサイズが小さく、身体への＜到着＞が満たされるものであれば、着点ＮＰは「ニ格」で標示され得るのであって、着点ＮＰの[場所性]に制約されることはない。また、(5c)の「お医者さん(＝お医者さんのいるところ)」のように、換喩的な解釈が働くときも「ニ格」で標示できることから、着点ＮＰが「ニ格」で標示されるかどうかは究極的に言語話者の解釈に帰着されるというのが本稿の帰結である。

4.ウナギ文再考

３つ目の現象として取り上げるのは、次の(6a)のような「ウナギ文」と呼ばれるもので、統語的にはコピュラ文でありながら、文字通りには「僕＝ウナギ」が成立しないところに特徴がある。

(6) a. 僕はウナギだ。
b. 私はウナギよ。
c. 僕もウナギ！

「ウナギ文」には、(6b)や(6c)のようなバリエーションも存在するが、この種の文に対して、＜述語代用説＞や＜省略説＞などの諸説が提示されてきた。奥津(1978)以来、最近の奥津(2001)でも、文末の「だ」が「を注文する」という述語を＜代用＞するとの分析を提示しているが、この＜述語代用説＞は、(6b)の場合、文末の「よ」に述語代用機能を設定しなければならず、(6c)のようにコピュラ(繋辞)がゼロ実現のときはには、何も記号がないところにまで代用という機能を認めなければならなくなり、こうした点に大きな欠陥があった。しかも、実は、英語でも文脈の支持があればI'm coffee.やI'm a hamburger.と言われることが知られており、＜述語代用説＞は、理論的に日本語で成立しても、英語や他の言語では通用しない。また、野田(2001)は、ウナギ文を省略表現(述語成分を省略したもの)と位置づけ、特殊な現象でないことを強調しているが、この説も無理がある。というのも、ウナギ文に省略がかかる前の姿、すなわち、「僕はウナギを食べる」あるいは「僕はウナギを注文します」という表現は、実際に、丼店で注文を告げるときに発するフレーズではないからである。ウナギ丼を注文するとき「僕はウナギを食べる/注文します」などとは言わない以上、これを「僕はウナギ(だ)」の省略前の原型と仮定する考えには無理が大きい。

この現象に対して、山梨(2000:112)では「ウナギ文」を「参照点能力」に基づく分析を示唆しているが、より明示的な分析は次のように与えられる。すなわち、ウナギ文が＜文字通りの

意味＞ではないという基本的な事実の観察から、「僕」の＜意図された意味＞を「僕が注文したもの」と換喩的に解釈するというものである。実際、「僕」と「僕が注文したもの」との間には、Lakoff and Johnson(1980)やKovecses(2002:155)が指摘した《CONTROLLER FOR CONTROLLED》ないし《ORDERER FOR ORDERED》の関係があり、ウナギ文も、《ORDERER FOR ORDERED》に基づく換喩表現の1つと考えることで、ウナギ文は、換喩という日常的な言語現象に過ぎないことになる。本稿の換喩分析説によれば、文末に「だ」のない場合にも何ら問題なく対応できるだけでなく、他の言語の場合をもカバーし、何より、述語の代用機能というアドホックな仮説を措定する必要もない。また、述語省略説と異なり、ウナギ文に省略がかかる前の姿として「僕はウナギを食べる」や「僕はウナギを注文します」という表現を仮定する必要もない。しかも、換喩と分析すれば、例えば、「ウナギ(＝ウナギを注文した人)は私です」「父(＝父の支持政党)は共和党です」「うちの娘(＝うちの娘が生んだ子ども)は男の子です」のような類例をも同じ原理で説明することが可能である。

5．おわりに

以上に見てきたように、比喩理論によって、これまで客観主義的な観点から分析されていたものに対して、より説明能力の高い分析が期待できる．なお、本稿の内容に関する詳細な議論は、菅井(2000, 2003)および菅井・八木(2003を参照されたい。また、紙幅の都合上、ウナギ文の分析について、国広(2003)や西山(2003)の見解との整合性には触れることが出来なかった。この点に関して稿を改めざるを得ないことをご容赦願いたい。

参考文献

奥津敬一郎　1978『ボクハウナギダの文法』くろしお出版.

奥津敬一郎　2001「接続のうなぎ文――やっぱり述語代用説――」『日本語教育』111:2-15.

国広哲弥　2003「英語の重層表現」語学教育研究所(編)『市河賞36年の軌跡』開拓社, pp.55-62.

菅井三実　2000「格助詞『に』の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』20(2):13-24.

菅井三実　2003「概念形成と比喩的思考」辻幸夫(編)『認知言語学シリーズ［第1巻］認知言語学への招待』大修館書店, pp.127-182.

菅井三実・八木健太郎　2003「変化動詞における時間的局面の換喩現象」『兵庫教育大学研究紀要』第23巻・第2分冊:1-8.

西山佑司　2003『日本語名詞句の意味論と語用論――指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房.

野田尚史　2001「うなぎ文という幻想――省略と『だ』の新しい研究を目指して」『国文学――解釈と教材の研究』46(2):51-57.

山梨正明　2000『認知言語学原理』くろしお出版.

山梨正明　2001「認知能力の反映としての言語――ユニフィケーションの視点――」『日本認知言語学会論文集』1:186-200.

Lakoff, G. and M. Johnson 1980 *Metaphors We Live By* Chicago: University of Chicago Press.

Kovecses, Z. 2002 *Metaphor: A Practical Introduction.* Oxford Univ Press.